# 戦旗

一九六〇年八月九日発行
発行所
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所
編集発行人　鍋木　潔
一部　拾円


万国の労仂者団結せよ！
革命的前衛・共産主義者同盟をすべての工場に組織せよ！
共産主義者同盟

# 合理化・職場闘争粉砕狙う 敵階級の正面攻撃

## 中労委あっせん案を粉砕せよ！

八月十日、三池闘争に対す中労委あつせん案がだされ、その内容が悪名高い四月藤林あつせんと実質的に同一のものとなつている中で、三池闘争は深刻な転機を迎えるに至つた。八月十八・十九日、炭労臨時大会は、三池闘争の今後の帰趨を決定的に左右するものとして開かれようとしている。闘争の主役、三池労働者は、大きな怒りにつつまれて再び闘争体制に入りつつあることを現地報道は伝えている。石炭合理化と左翼労働運動の最大拠点にかけられたこの政府資本家階級合意の攻勢をいかに反撃するかは焦眉の課題となつている。

原炭労委員長は、調停に対して「中労委はわれわれをペテンにかけたようなものである」とろうばいの色をかくさなかつた。

一方三池現地の労働者は、圧倒的に、

「首切りだけは撤回するだろうと考えていたが資本家をあまく見すぎた」と思いをぶちまけ至急闘いの体制に入つている。

この全く「原則的」なあつせん案という名の資本家階級の攻勢の中にどのような階級闘争の縮図をよみとることができるのか、その解明から出発せねばならない。

一ケ月前七月上旬、三池現地は階級闘争の焦点として緊迫の極にあつた。安保闘争の痛手から立ち直り、池田内閣の出発にこぎつけつつあつた資本家階級は、三池の激突により再び収拾のつかない激動にまきこまれるのをおそれ、三池休戦を働きかけることによつて政治支配の安定の実現をめざした。

石田―藤林、中山のコンビは、総評・民同の白紙委任の決定的な裏切りに助けられながら、見事にこの課題を実現した。事実三池は人々の頭の中から去り、武装解除された三池は、自らの力にたよることはできず敵のマスコミの攻勢と警察の弾圧を歯をくいしばつてだまつて耐えしのぶことしかできなかつたのだ。

労働者と人民の闘いの力は、六・二二以後社会表面に現れず、池田内閣にたいする人民の不信もはつきりと表明されず結集されもしなかつた。

池田政府は、一挙に自からの廻りに広汎な中間層を再結集することに成功した。

この間労資の力関係は、深刻な変容をうけてきた。

即ち、白紙委任をあえてした総評民同は、現地動員体制を自から解くことによつて現地における優位を自から崩し、一方、中山、藤林は三井資本の抵抗を理由に、あつせんの時期をのばしのばし、ついに総評大会後にもちこむことに成功し、万端ととのつた中で、一挙に原則的な攻勢に転じてきたのである。

この時点にあつては、政府資本家階級にとつては、一ケ月前に比し、極端に処理しやすいものになつてきている。

即ち、解雇を自発退職の名にきりかえる、そして退職者には転職の便をはかるという全く無内容の修飾をほどこしながら、活動家指名解雇というプロレタリアートに対する決定的攻勢を有無を云わさず極めて原則的におしだしてくるに至つたのである。

しかも、この中労委あつせんの中に、同時にわれわれは池田政府の性格を、更に、かれらの労働政策の原則点を端的に明確することができる。

低姿勢の池田内閣と云われているけれども、これはその性格を極端に見誤ることになるであろう。

たしかに池田内閣は、離反した中間層を再結集するために、偽装をふりまいてきた。そして商業新聞の世論調査で、過半の支持率をかちとる迄に至つてきている。しかしこのことは、労働者階級への攻勢が弱まることを意味しはしない。勿論小市民層を離反させないという総選挙前の特別な配慮が、例えばむきだしの弾圧立法の上程を手控えさせたり、資本攻勢が特殊に粉飾されるというようなことはあるが。

何れにしても、三池の労働者が「池田がこんなあつせん案を出させたのだ。政府と三井資本はグルだ。」と語つているように、この三池闘争中労委あつせんの中にこそ、池田内閣の階級的性格が如実に現われているのだ。

あつせん案は、池田内閣の労働政策の高姿勢を明白にしている。長文の前文は第一に指名解雇＝レッドパージの実施、第二に職場闘争の否定、第三に「暴力的な」争議行為の否定を大原則としてうたつている。

これは何れも、池田内閣の労働政策の基本を示したものといえる。

三池の今次の闘争は、自発退職者が、三井資本の整理予定人員を上廻るという事態の中で、レッドパージを許すか否かを、決定的な対決点として闘かわれたのだ。

三池労組が、日本労働者階級の最大の部隊として闘争をつづけてきた点を考えるなら、この労組に対する千二百名のレッドパージの決定的な意義は明らかだ。それは、日本労働者階級の背骨に対する打撃であり、当面の敵階級の攻撃のすべての結集点である。

一度この指名解雇を許すならば、レッドパージは容易に他の炭坑に、他の産業に波及することにもなるであろう。更に又、石炭資本家は自信をもつてそれぞれの合理化計画を進めてくるにちがいない。現に雄別炭鉱では石炭資本は、指名解雇とひきかえに、労働条件の大巾引下げを実現するにいたつた。又、北炭夕張をはじめとする合理化計画にも直接的影響を与えることはうたがいない。

したがつて指名解雇を許すか否かは同時に石炭合理化計画の進行に決定的な影響を与えずにはおかないのである。

石炭協会発行の「石炭鉱業の合理化計画について」は、三三年度一八万四八〇八名の労働者を、三八年度計画一二万四七〇五名に、つまり、六万一〇三名の削減を行うことを決定している。予定されているこの数万人、全体の三分の一の首切りを控えて、三池闘争の意義ははかりしれないものがある。

全炭労、全日本労働者は三池とともにたて！

三池闘争途上最大の深刻な局面を迎えて、今こそ、全炭労、全日本の労働者が三池の仲間とともに闘いに立ち上ることが決定的に要請されている。

現地からの報告では、三池は、不満と怒りにもえている。三川支部委員会では、直ちに闘うことで意志統一し、炭労・総評へ闘争支援要請決議を行つた。各地域分会、青年行動隊、機動隊その他は、一斉にあつせん拒否で動き出した。あつせん案があまりにもロコツな資本家の意志を示しているため、内容をいかに解釈するかという論議は全くない。現地指導部は四十分後には拒否を決定した。

更に十八・九日の炭労大会において、激烈な宣傳合戦と第二組合への切り崩しを重点にゆさぶりが開始され、その中で、労働者は、

「金を少しはずめば、労働者はどうにでもなると考えているが、そうはさせないぞ。」

「藤林の時の気持と少しも変らない。これをのんだら今までの闘争は何にもならない。」

「全学連の考えていたことが正しかつた。徹底的にやるぞ。」

「こうなつたら会社が手を上げ、池田をブツ倒すまで命がけで闘うぞ。」と語つているという。

三池労組の執行部も拒否で闘うハラを決めているといわれる。だが、炭労大会でも拒否を決定させるため、死力をつくして闘う構えはできているか？

炭労、総評の執行部は、あつせん案を認める方向にはつきりと傾いている。三池が、総評や炭労はどうであろうと俺たちはやる、という態度を明らかにしない限り、この大勢は打開できない。

もちろん、闘争の展望は困難である。しかし、今こそ三池が、たとえ一人になつても闘いぬくという構えを固めることによつて、はじめて全国の労働者の潮のよせるような支援も開始され、全逓、日教組、官公労の闘争ともに、血のつながりをよび起すだろう。労働者として絶対に認めることのできぬ屈辱を、生死をかけて、はね返す闘いを組む時、そこにはじめて労働者階級解放の展望が見出される。

三池にたいする攻撃の本質は、日本資本主義そのものに根拠をもつている。エネルギー産業としての石炭産業の合理化は、現在の日本資本主義の強化にとつて最大の必要事になつている。

鉄鋼、化学、その他日本資本主義の根幹部分をなす産業の独占資本が、「自由化」の前提に、石炭合理化をおいている。

劣悪な自然条件の中で、炭坑労働者の極たんな低賃金に依存して来た石炭資本は自然条件に有利な「石油」の進出によつて、合理化を要求され、同時に、この日本資本主義の自由化へむかう強化の中から、とくに合理化が要求されている。

それが六万人の首切りの根拠であり、その突破口が三池なのだ。

とすれば、総評、炭労のように、石炭合理化の本質を、利潤追求のための単なる「政策」であるとしたり、石炭資本家のこれまでの「失敗」から出たもので「失敗」を正せばよい、というものではなく、日本資本主義の生命にかかわる攻撃なのだ。

だからこそ敵階級が、総力をつくして、三池の粉砕をはかつているのだ。だからこそあつせん案が出た瞬間に、宮川組合長以下二〇名の炭労、三池の組合幹部に対する逮捕状が出ていることを明らかにする等、露骨な攻撃を、あえてするのだ。

この闘いについて安易な闘いの幻想をもつことで勝利はかちとれない。それでは、闘いの困難な局面において逆に大きな動揺をひき起すだろう。この攻撃の本質をはつきりとつかみ、三池の闘いを全階級の、とりわけ基幹部隊の労働者の闘いに結びつけて行くこと、そして階級対階級の対決をつくりだすことの中にのみ勝利の展望がある。

あつせん案を拒否すれば、再び闘いは力と力のむきだしの対決になるだろう。

敵は第三組合結成の攻撃を始めるだろう。

今こそ全炭労が、敵の合理化首切を粉砕するカギとして、三池とともに立ち上るときだ。

今こそ全日本の労働者階級が、三池をオルグと金でつつみ、そして、自らの闘争を、三池と結びつけて闘うときだ。

現時点でのわれわれの方針は、第一に、炭労大会であつせん拒否の態度を明確にせよ！

第二に、三池闘争を全炭労、全日本労働者階級の総力をあげた闘争として発展さすべく全力をあげよ！

三池支援の資金保証を炭労大会を皮切りに各単産で行なえ！

すべての職場から三池のそして炭労大会へ、闘いの支持と資金援助と共闘を表明しよう総評は臨時大会を開いて闘争体制をとれ！

炭労は、各単組の合理化闘争を指令させながら、ゼネストで闘かう方向を追求せよ！

全国凡ゆる生産点からオルグ団を三池に集中せよ！

全逓非常勤闘争国鉄・電通合理化反対、中少企業の合理化反対の闘いを三池と共に闘いぬけ！

炭労と闘う単産の共闘委員会を作れ！

とりわけ十八・十九日の炭労大会は決定的な重要性をもつている。

炭労大会へむけて資本家の、分裂主義者の、そして既成指導部の、妨害が行なわれるにちがいない。

三池現地でも、第二組合特に第三組合の動きは活潑を極めるにちがいない。

このような一切の妨害をはねのけて、炭労大会の拒否決定をかちとり、三池現地における鉄壁の構えを実現し、全日本労働者の総力でそれを包む以外に、三池闘争の展望は与えられないし、日本の戦闘的労仂運動と、炭労数万の解雇反対闘争は、暗雲にとざされるであろう。日本労仂者階級の全力で、中労委あつせんを粉砕せよ！


「戦旗」固定購読

お申込みは
新宿区東大久保二の一五五
世界労働運動研究所内
戦旗経営局
定価　一部　十円
月　四〇円　半年　二四〇円


公安條令判決下

# 初の首相官邸デモ

## 八・九大会会場よりデモ

池田内閣の低姿勢の仮面をハギ、弾圧反対ののろしを上げるべく、全学連は八月九日首相官邸デモを決行した。

安保闘争の後全ての勢力が池田内閣との闘いの目標を見失い、きびしい処分と弾圧に何ら対処し得ないでいる時、全国から一万人を集めて開かれた原水禁世界大会は、日共のフラクションで固められ現実の闘う方向を何一つ打出し得ず反米闘争と軍備全廃の空論に終始していた。

このことを事前に感じた全学連代表は、こうしたふんいきと明確に対決し、労働者階級の闘う力を引出し、学生戦線の九月闘争の方向を示すため、首相官邸デモを行うことを全国自治会代表者会議で決定した。

公安当局は、世界大会の学生協議会の会場に機動隊をくり出し、全自連の分派闘争で混乱しているのに乗じて突入、六・一五で東大教養の加藤君（主流派）とハガチー事件で教育大の黒羽・女屋君の計三名を逮捕した。この厚顔不礼な攻撃に対し学連はただちに警視庁に抗議デモをかけるとともに、一層の怒りをもやして九日のデモに取組んだ。

世界大会総会の会場で、全学連はデモ参加を訴え日共民青の防害と闘いつつ会場で隊列をととのえ、学生とともに参加した若干の地方代表やお母さんを加えて出発した。

公安条例判決後、初のデモとして、不満ながら公安委員会の許可をとつて細心の注意を払つている全学連に対し、警察はきわめて高姿勢で、会場の都体育館から地下鉄に乗るまでの間を「無届デモだ」と弾圧、これをはねのけて、許可コースの日比谷公園から首相官邸に向かう間も、きわめて露骨な弾圧が続けられた。

世界大会に集つた地方学連代表、高校生代表を含めた二百のデモは、六・一五の激突点である国会南通用門ではげしいジグザグを行い樺さんの霊に力強い闘いの決意を示すとともに、復讐を誓つて首相官邸に向つたここで指揮者の命令にもしたがわぬ警官隊の狂気じみた暴行と闘いながら抗議集会を開き、虎の門から新橋までジグザグデモを続けた。道中官庁ビルの窓からは組合旗が出され、労働者の激励の手がふられ、闘いへの連帯が示された。五時過ぎ新橋で、デモの意義を確認し、ただちに秋の池田内閣打倒、弾圧粉砕の第一波九・一五闘争に取組む決意を固めて解散した。

# 小ブル思想と代々木路線を打破り 階級闘争に役立つ運動に

## 第六回原水禁世界大会の実態と ――新らしい平和運動への道

岸本　健一

第六回原水爆禁止世界大会は、恒例通り大会宣言を発表して終了したが、現在の時点において労働者階級、人民に課せられた課題に対し、大会の内容はあまりにも貧弱であり、それは六回を数える世界大会そのものと、原水協自体の存続理由に深刻な問題を投げかけている。帝国主義者の最大の兇器である原子兵器に対する憎しみと、反戦平和を基礎に、広汎なエネルギーを独自の大衆運動として発展して来た原水禁運動が、六年の間にいかなる発展をとげ、今日の時点においていかなる方向に発展すべきであるかを明らかにすることなしには、広汎な人を集めながら、それに有効な「平和運動のヒントさえ与え得ない」現状は、ただ労働者階級のやつかいな荷物になるであろうし、大きな幻想の道具にさえなるであろう。このためにはまず第六回世界大会の事態を見突めねばならない。

### 闘う大会の内容

日本中のあらゆる階級が政治の中に介入し、安保の大闘争を闘い抜いた直後の大衆集会である以上、世界大会はこの闘争の中から豊富な教訓を引き出し、安保闘争が作り出した新しい情勢に応じた行動の指針を打出すことが、当然の任務であつた。

だが、原水協は、その様な現実の人民の闘争に根をおき、そこから闘いの推進者として方針を打出すという姿勢をまつたく持つていなかつた。その代り、原水禁運動を一貫して「指導」してきた理念から出された「方針」を頭からかぶせたといえる。

第六会大会は、北海道――沖縄の平和大行進にはじまり、外国代表招待から大会まで、昨年の大会と何一つ変るところなく行われた。世界大会が「夏の行事」として固定化されたことは、これをもつても明らかである。問題の提起と、それをめぐつての討論、そして一致を見出すといつた会議のルールでなく、巨大なお祭り気分の中で「確信を持つ」といつた、ちようど五五年ころの「平和友好祭」や「うたごえ」と共通のムードの中に立たされていた。

このうえに、打出された方針は「第五会大会を、私は『嵐の中の世界大会』と呼びました。今年の六回大会にむけても、嵐は吹きすさんでいますが、私はこの大会にのぞむ平和勢力の代表の強い気魄と積極的な態度をはつきり示すために、これを『闘かう世界大会』と、呼びたいと思います」という安井理事長の一般報告にもとづいて、「闘う大会」を看板にかかげた。

しかし、その内容は、安保闘争をうけつぎ、政府権力と闘かうものではなく、「軍備全廃をめざす」ことを中心に、この点から戦争勢力・冷戦派とたたかうものであり、これをさらに進めたかたちで日共から「平和の敵を明確にせよ、それはアメリカ帝国主義だ」と、反米闘争の路線が強行に打出された。

この路線は、公認共産主義者の思想――平和共存論の路線として、全世界人民の闘いをソ連外交路線のうえにのせ、帝国主義に対する人民の反政府闘争ではなく、小市民的平和カンパニヤによつて、資本家階級の「政策転換」を要求することを目的としており、これが今年の大会では特に鋭い「反米」の形で出たことを意味している。

「平和の敵を明らかにせよ！」というスローガンは、実は、五七年の第三回大会（十一・一国際統一行動を決め、米・英の核実験に反対する大衆闘争が全学連を中心にはげしく盛上つていた年）で、われわれが指導していた全学連から出されたスローガンであり、これに最も頑強に反対したのが原水協中央と日共であり、その理由は、「ヒューマニズムで結集した運動の巾が狭まる」というものであつた。

それが、三年後の今日になつて、それまでの総括もなく突如あらわれ、しかも当時のわれわれが自からを平和共存思想から解放した後であらわれたことは、何を意味するのだろうか。

これこそ、原水協をリードしている人々が、現実の階級闘争に根をおいていなければ、おこうともしていないことの現れである。

「闘う大会」「反米闘争」が全面に出たことは、U2機事件以来のモスクワ外交路線の高姿勢と、特に中国の反米闘争の姿勢を、直接無媒介的にとり入れているとしか見えない。安保闘争をはじめ、韓国、トルコ、キューバ、イタリア等々と全世界でまきおこつた反政府闘争を、正しく見るならば、これを「反米」にすりかえることではなく、各国人民の資本家権力に対する闘いとして発展させるべく、強力な国際連帯と、その方向での日本の「平和運動」の展開を考える視点こそ必要なのである。しかも同じ「闘う」といつても、直接人民がぶつかつている日本の政府――池田内閣におくことに頑強に反対する裏には、「反米」なら統一できる、という相変らずの巾広主義があることを見落すことは出来ない。この視点の欠除が、独自の運動方針を出すことも出来ず、一般的な「闘う大会」で終つた原因である。

### 安保の力を結集しない大会構成

大会討論は、安井理事長の基調報告を支持し、これにのつて「アメ帝との闘い」を主張する日共の、きわめて統制のとれたフラクションに対し、被爆者とか、地方の町村における活動家が、恒例の巾広イズムを主張したり、体験報告を行つたりで、討論にはならない。全学連が日共の理論にたいし、安保闘争の総括のうえに池田内閣打倒をかかげて正面からぶつかつて、はじめて論議はかみあつた。しかし、少くとも昨年の大会までは、こうした基本的問題について積極的に論議に参加した労働者の活動家が、この大会にはほとんど姿を見せないため、論議は宙に浮いた感である。

全学連の問題提起を受けとめ、安保闘争の教訓を、闘いを進める立場から考えたものは、地方で共闘を組織してきた地区労系の活動家のみであつた。

安保闘争を反映して、一万人という大人数が結集しながら、その構成メンバーが労働者の基幹部分をほとんど含んでいないことが、今度の大会の特異な面であり、それだからこそ「軍備全廃」や「反米闘争」の日共の路線が、「統一」の名のもとに通用したといえよう。地方の「地道な」組織活動にとり組んできた活動家や、六・一五闘争に涙を流した母親達の善意に溢れたエネルギーが、こうした小市民的空論の中に霧散させられることは、労働者階級にとつて残念なことではなかろうか。

### 安保闘争で 役にたたなかつた原水協

では、なぜ労働者の中心部分が、今年の大会に参加しなかつたのだろうか。

総評、各県評はじめ、多くの組合でひかえ目に語られている参加費の問題（今年も一人地方は五千円！）を別にしても、労働者の感覚として、安保闘争の中で原水協が何もしなかつたこと、そのうえに相変らずスローガンが「原水禁・軍縮・平和行進」等々であり、目の前の敵と闘うのに役立つものがなんら感じられないことが最大の理由であろう。一昨年は、闘いの最中の勤評闘争の論議さえ敬遠し、昨年はすべての人々がこのために集つて来た安保反対を、自民党の脅迫にあつて決議するのを拒み、平和の自己満足に陥つている感じの世界大会は、「闘い」の場にならない夏祭りとしか感じられないのである。

もちろん、地方活動家などから、安保闘争の指導性の欠除が追求され、「大会のための大会」でなく日常活動の方針を、と要求が出されたが、世界大会の機構そのものは、そうした討論から運動方針を打出すのでなく原水協常任のあらかじめ作られたプログラムを感激的に逐行するのみなのである。

さらに、樺さんへの世界平和賞受賞を拒否した問題を、たくみに覆いかくしたことからも明らかになつた原水協常任――日共の私物化は、大会を一層闘う大衆から引きはなしている。

今年の大会においても、「闘う大会」と銘打つても結局独自の方針を何一つ出し得ず、みずから夏のカンパニヤであることを暴露した以上、世界大会そのものを根本的に考えねばならない時に来ている。

### 原水禁運動の歴史的功罪

世界大会は、ここ数年間日本の「平和運動」の中心として独自の大衆運動を組織して来た。それが、今大会に見られるごとく、現実の階級闘争から自己を絶縁するのみならず、小ブル思想の発生地とし、日共を中心とする日和見主義に物質的基盤を与えるのみのものになつてしまつたのは、いかなる理由によるのであろうか。

杉並区の母親の署名にはじまつた原水禁運動は、相次ぐ核実験を前にはげしい大衆運動として発展し、特に五六、七年には、「平和擁護闘争」として、政治闘争として闘われた。当時、これを人道主義による非政治的運動に限ろうとする傾向や、それに引づられる根強い巾広論と闘い、「平和の敵」帝国主義者との闘いとして、明確な政治闘争として進めて来たのは、全学連と先進的労働者であつた。

反戦、平和の大衆的エネルギーを、一つの政治闘争に発展させ、国際的にもかなりの反響をよんだこの闘いは、しかしその推進者であつたわれわれ自身が、根強いスターリン主義の思想にとらわれ、平和共存のワクの中で何とか革命的方向を追求しようともがいていた現実を反映し、日本の階級闘争が国鉄新潟闘争から勤評闘争へと深刻化するに及んで、明らかに破たんしてきた。世界大会が、行動方針をうち出した最後である、十一月一日の核実験反対国際統一行動デーが、学生運動内部に「ジグザグ論争」という妙な形ではあるが、日和見主義との決べつに火をつけたことは偶然ではなかつた。

五八年の四回大会が、続発する中小企業を中心とする流血闘争、王子製紙の大ストライキ、勤評闘争の中で、さらに国際的にはフランスの決定的危機を中心とした世界的激動の中で開かれながら、これに敏感に反応し、小ブルの大量の参加はあつても、これを反政府闘争に転化しようという構えが、原水協中央に全ぐ見られなかつたところから、世界大会は「夏のお祭り」となる道を歩みはじめたといえよう。

さらに、五回大会において、安保闘争という、小市民的平和運動、民主主義運動であつても、労働者階級の側に立つて反政府闘争として発揮出来る絶好の機会があたえられたにもかかわらず、大会参加者の大多数の意向を無視して、大会を安保反対総決起大会にすることを高圧的におしつぶしたことによつて、単なる夏祭りから、階級闘争の足を引つぱる機関に転落したのである。

五回大会では、それでも安保の本質、闘争方向において激しい論議が闘わされ圧倒的な小ブル思想の中でも闘いの指針をくみとるいくらかの役割は果した。

しかし、その後の安保闘争に何ら原水協がその組織して来た力を指導しなかつたのみか、今年の大会で何の自己批判もなく「軍備全廃」「平和行進」をかかげることによつて、安保闘争を一貫して阻害して来た小ブル思想の巣くつの実態を露出したのである。

そこには、もはや大衆闘争は存在せず、せつかく安保闘争でつかまれた資本家政府との闘争の姿勢を失わせる反米闘争と、「軍備全廃、平和共存」のバラ色の幻想と、それでもなお「闘つている」と思わせる自己満足しかない。しかも、莫大な原水協の資金と常任はそのまま日共の物質的基盤となるのである。

かつて、青年、学生の全エネルギーを吸収し、これを全く階級闘争から切はなして来た「歌え、踊れ」の平和友好祭――フエステイバル――（そしてこれが「民青」の物質的基盤であつた）をキツパリとのりこえたところから、革命的学生運動が再生したように、この世界大会の現状を大胆に打破ることが、労働者階級の戦列から小ブル思想をたたき出し、新しい前進を開くものである。

### 新しい平和運動の展望

「原水爆禁止」は有効なスローガンになり得ないとはいえ、帝国主義者の戦争に反対する「平和運動」は大衆運動として存在する条件を十分「役に立つもの」として自分の側に獲得し、資本家政府への闘争とすることが出来るし、広汎な国際プロレタリアートの連帯を進めることも出来る。

労働者階級が、小ブル運動から必然的に発生し、日共等によつて意識的に注入される小ブル思想――巾広主義・軍備全廃・平和主義等々――を、この中でいかにうち破り、自からが主導権を握つて小ブルを引つけて行くことが出来るかが、課題である。

それは、いきなり原水協脱退を宣言するだけでは決して出来ない。

今日、原水協の下部組織を実際に指導しているのは、市町村議員や居住の活動家を別にすれば、地区労や、地域活動にとり組んでいる労働者であり、政党員である。

だが、職場においてはどうであろうか。特に五六年ごろから作られ、のびなやんでいるいわゆる「平和組織」――平和を守る会等が、民同指導に不満を持ち、組合の経済主義的、官僚主義的方向を何とか打破り、政治闘争を推進する意志を持つた活動家を集める反面、「平和活動」をはじめると、たちまち「平和屋」になり下り、現実の資本との闘いを忘れた、バッチ売りや、軍縮論議に自己満足している事態どう見るか。

この原因は、いうまでもなく、これら平和組織を一貫してつらぬいている思想――まさに平和共存論から発し、日共によつて、原水協平和委員会から各サークルに至るまで持込まれている――にある。日共中央のズブズブの反米愛国主義、民族主義に叛旗をひるがえし、現実の労働者階級の状況に根をおいて「闘う」姿勢をとつている日共左派――構造的改良派のグループが、より公然とした活動によつてこれら平和組織を動かしたとしても、その基本姿勢が変らぬ限り、労働者階級を迷わし続けるだろう。現に、今大会で、原水禁運動を明確に政治闘争と規定し、反独占統一戦線の一翼である独自運動に仕立てようとした試みも、階級闘争の現実からはなれては、結局何ら具体的な方針――大会会場にまで加えられた弾圧（学生の検挙）に対してさえ、抗議行動一つ組織出来ないことを示すに終つた。

これまで、同じ系列の団体が、多く大衆運動から、しりぞき、特殊目的にそつたものに小さくまとまつて、それなりに有効な地位をしめた例は多い。AA連帯委、基地連、日ソ、日中、日朝協会等はその好例である。それに対し、日本平和委員会が、もはや忘れられた常任の集団と化したことを思う時、今日の原水協はどうすべきだろうか。

自民党、民社党は、それぞれ独自の原水協をつくろうとしている。彼等の腹黒いたくらみを排し、犠牲者のめい福を祈り、原水爆への憎しみを新たにし、被爆者を救い平和を祈るために毎年八月六日から九日に大会が続けられてよい。

だが、労働者階級を中心に、広汎な中間層を引きつけ、帝国主義者の略奪と殺人に対する怒りは、反戦平和の大衆運動として、労働者階級を中核に新しく組織されねばならない。

それは今日の原水協のごとく、小ブル思想の発生地を中心部から、労働者階級が、ねばり強くこれと闘い、かつ小ブル平和運動の積極的な面を生かして行くものでなければならない。

大会で、西独の代表は訴えている。「われわれの国は資本家や社民指導部におさえられ、マスコミに支配されて何も出来ない。だがそのマスコミもあなたがたの安保闘争を伝えずにはおかなかつた。あなたがたの闘いを聞いた西独労働者は、『日本流に話しをしよう』と、組合幹部をつきあげはじめた。あなたがたは屈せず闘い抜いて下さい」国際プロレタリアートの連帯に役立つたごく少しの例がこの発言ではなかろうか。

安保闘争において、果し得なかつた課題――広汎に闘いに参加した小ブル大衆を、労働者階級が階級として闘うことによつて引きつけることを、今後かちとらねばならない。

原水禁大会が、労働者にとつて「役に立たなくなつた」ことをはつきりと暴露し、さらにこれを「有害なもの」にしている日共の思想と指導に真に非妥協的に闘うことをよびかけ、平和のムードへの幻想を捨て、現実の資本との闘いに立上る中で、新しい組織的結集の方向を追求して行こう。

日共の私物と化し、日和見主義の発生地となり、闘いの役に立たなくなつた原水協への、幻想を大衆的にたち切つて、新しい結集の方向をめざすためには、まず日共の反米闘争路線を打破ることから始められねばならない。

スターリニストの

# スターリニズム・トロツキズム批判

## 津田道夫「現代のトロツキズム」によせて

南　成四

「清水幾太郎から丹羽文雄に至る多彩な人々が、共産主義者同盟という現象を一つの事実として承認した。かつては暗い地下的な響きなしには語れらなかつたトロツキストという言葉からタブーは消えた」（「思想の科学」八月号における渡辺一衛の発言）共産党の完全な崩壊現象と我が同盟の飛躍的前進は「トロツキスト」という言葉の持つドグマテイツシユな影をふり払い、全理論戦線をドグマの泥沼から解放しようとしている。言霊信仰の妖気たちこめる共産党の「トロツキスト」「修正主義者」退治から理論戦線はほがらかに袂別しようとしている。我が同盟に対する批判が「宗教的」次元から「理論的」次元に飛躍しうる条件こ、今、つくり出されているのだ。で、津田道夫が「現代のトロツキズム」なる労作をひつさげて登場したと知つた時、その標題からうけるチグハグな印象を別にすれば、この書が新左翼に対する最初の体系的、建設的批判を提起してくれるであろうかとなかば期待に胸ふくらませて手にとつたのである。第一章を読み始めるや期待は裏切られた。まず、波がそれでもつて分析を進める範疇問題とせねばならない

### 一、スターリニズム——具体的政策の普遍化

津田氏はスターリニズムとトロツキズムの比較検討をもつて本書をはじめる。

スターリンがソ連の孤立化の中でとつてきた政策はある局面で妥当性を持つ政策としては正しかつたと認めざるを得ない。ただ、と津田はいう——彼は特殊な条件のもとで妥当な特殊な政策を、一般原則にまで拡張してしまつた。そして一国社会主義論を中心に分析を進めつつこういう。「ヨーロツパの革命的高揚がいちおうの終熄をみせたのち、ロシアのプロレタリアートは、自分の力で社会主義建設を余儀なくされた。そして自国のみでも社会主義を建設しなければならぬし、しうるのだという確信が与えられなければ彼らは意気沮喪してしまつたであろう。生産力の発展はソ連プロレタリアートの社会主義への情熱をかきたてていた。スターリンは、このように新たに現われた条件をたくみにキヤツチしてそれにマツチした政策を「一国社会主義」として提起したが、「このこと自体はもちろん正しかつた。」（ゴチツクは引用者）しかし、スターリンには「一国社会主義」論をマルクス・レーニン主義の普遍原則として理念化する傾向があつた。

これに反して——と津田氏は考える——トロツキーは一般的には正しい原則的理念をもつてあらゆる特殊問題を割りきろうとした。スターリンの一国社会主義論に対する反駁も抽象的な「世界革命」という『観念』の対置に終つている。それはスターリン的実利主義に対しては『場合によつては』一定の理論的チエツクのいみを持つものであつたが、特殊問題において具体的政策をたてる段になると完全な不能を暴露するのが常であつた。更に津田氏は「ロシアにおける社会主義の真の高揚は、ヨーロツパのもつとも重要な国々でプロレタリアートが勝利したのちにはじめて可能となるであろうということを確信をもつていうことが出来る」という文章を含む有名な『平和の綱領』の一節を引用していう。「この立場は、かつてはレーニンのそれであり、スターリンのそれでもあつた。だが、この立場が、現実の経済建設が進んでいる時にまで、たんに理論としてでなく、宣伝的な定式としてもちこされる時、それは労働者階級の意気を沮喪させ、彼らを西ヨーロツパの革命運動に期待させる・最悪の日和見主義に導くものとなつたのである。トロツキーの、このような待機主義＝日和見主義的な路線に対する闘争の先頭にたつていたのはスターリンである。」

しかしながら、スターリンはトロツキーに対して相対的正しさを主張しうるとしても、一国社会主義論争に典型的にみられるような論争態度、方法のグロテスクな誤りは、やがて現代共産主義の思想と政治の中に多くの歪みを導入することとなつたのである。

以上が津田氏のスターリン・トロツキー批判の概要である。

そこで特徴的なのは、一方における具体的政策の原理への普遍化、他方における原則論の特殊への適応という単純な類型化・分析方法しか氏が持ち合わせていないことであり（論争におけるコミユニケーシヨン・ルートの断絶の問題に気がついたことはせめてもの幸いであるとしても、思想としてのスターリニズム、トロツキズムの問題を扱おうとする現在、さしあたつて別次元のことである）、そこからはこれこれの場合は正しいがこれこれの局面では誤つているといつた式の現象的批判しか導き出せない。これは本書を一貫する極めて特徴的な事実なのであるが、一例をあげれば、スターリンの「普遍化」傾向は一国社会主義を理念化しそこから「ソ連に対する無条件的忠誠」が世界プロレタリアートの任務として各国共産党におしつけられるようになる。だから現代トロツキストのいう一国社会主義の自己目的化が世界革命を裏ぎるところとなつた、という非難にも一面の真実が反映しているといわねばならぬ。といつた具合である。

単純・明快な二つの範疇に整理することをもつてことする津田氏自身の理論的立場については後にふれるとして、一国社会主義論がはたしてこんな意味しか持たないのか、次に検討してみよう。

### 二、一国社会主義論の意味

一国の内部のみでの社会主義建設が可能であるかどうかという議論は——全革命論争のコンテキストからはずして——それだけをとり出して考えるならば、無意味であり・論証不可能な問題である。スターリンは一、国内においてプロレタリアートによる全一支配が可能であるか、二、帝国主義の干渉から守りうるか、と問うて、一については「しかり」と答え、二については、それは各国のプロレタリアートの闘争如何による、従つて一国における社会主義建設が可能であるということと、全面的に勝利しうるということは分けて考えねばならない、一国における社会主義建設は可能であると論ずる。彼にあつては、一国は国際的関連の中にのみ存在しうるのであつて、孤立したソ連は必然的に帝国主義諸国の影響をこうむるであろうこと、各国におけるプロレタリアートの闘争・ブルジヨアジーの行動は予測的には確定不可能であるから、世界的なつながりにおいて眺めればソ連の存在そのものが扼殺されないという前提もまた不確定であること、が見落されている。

月ロケツトを打上げて、「優位」に立ち、今や「世界体制」になつたといわれる「社会主義圏」についても——主要な工業国においてプロレタリアートが未だ勝利していない段階にあつてはそれが政治に身をおく限り依然として政治の論理・不確定の論理に左右される。

このように、スターリンが一国社会主義論をたてたことの意味は、津田氏のいう如く、スターリンがソ連にとつてその時点の具体的政策としては正しいこの理論を原理の問題にまで普遍化した誤りなどというものではない。論理的に不可能なこの「論理化」をおこなつたスターリン理論がなぜ有効なものとして受入れられえたのか、否、なぜ論理的に不可能な一国社会主義論が革命論争の中心にすらなりえたのか、ここに全て、鍵がある。

ドイツ革命の敗北に続くヨーロツパにおける革命的高揚の退潮の中で、ネツプを経過したソ連は徐々に生産を回復していつた。ヨーロツパの革命への望みは断たれたが、ソ連のプロレタリア権力はその基礎をかためつつある、彼等はそう感じ、そこに悪循環から脱する道があると考えた。スターリンはこの気分を敏感にキヤツチして彼の一国社会主義論を提出した。たとえこの一国社会主義論がどんなに非弁証法的であろうとレーニンの国際主義からどんなに遠かろうと、たしかにそれは大衆の気分を反映していた。

世界革命の精神に鼓舞されたレーニンの十月革命の精神、すべてのプラカードに「世界革命万歳」と書いたあの十月の人々はどうしたのか。あまりにも苦しい国内戦とそれに続く建設、待ちこがれた革命の見通しがまつたく絶たれ、自力で起ち上ることを余儀なくされた後進国ロシアが一応の安定を見せた時期、勝利したドイツ・プロレタリアートの援助のもとで社会主義生産への前進が直ちに開始されるならば、人は矛盾に満ちた一国社会主義論など必要としなかつたであろうに。しかし社会主義建設の問題は、いまやドイツ革命との関連では考えられぬと思われた。国内では苦しい建設。袋小路に追いこまれた革命的大衆は社会主義への情熱の出口をスターリンによつて与えられたと考えたのである。

ドイツ革命の挫折・レーニンの死・スターリンの存在といういわば「偶然的」諸事実のカラミアイが、以後の国際共産主義運動の動向に決定的な影響を与えることになつたのである。

### 三、ドイツ革命の挫折とスターリニズム

さて、津田氏は、「現代トロツキスト」批判の中核として、彼等が共通してとり上げるソ連官僚の問題をとり上げ、トロツキストのいう「官僚」がスターリン批判を行うなどとても考えられることではないと断じたあげく、「社会主義的官僚」と非社会主義的「官僚」、「レーニン的官僚」と「スターリン的官僚」なる珍範疇を創造して、ソ連は問題を含むにせよ社会主義国であると論じている。

レーニンは「国家と革命」の中で、誰でも官吏でない事務管理を想定している。だが、ソ連が苦しい建設の時代に入るやレーニンは、官吏の俸給が高額にすぎると警告を発せざるをえなくなる。この言葉に、私は悲痛な叫びにも似た響きを感ずるのであるが、それはドイツ革命の挫折とロシアの後進性のためにレーニンの努力をよそに、生産管理者が総ゆる障害をのり越えて一つの階層・官僚層を形成していつた、という事情による。生産力の低い後進国ロシアにあつて、官僚はレーニンの意図に反して官僚であつたのだ。「レーニン的官僚」！ああ、私はほとんど津田氏の創造力に敬意を表したいくらいだ。

そこでのレーニンの前提は生産力の高度に発達していることであつた。そして生産力の飛躍的発展こそ官僚廃絶の可能性を用意する根本的な条件である。だがドイツ革命の挫折はソ連の生産力の発展をまさにその官僚の手で行なわせるというパラドツクスを実現したのである。このパラドツクスを比類なき「政治一家・スターリンが完成することになる。

政治の論理は自己の判定による敵の決定であり、「やつは敵だ、敵を殺せ！」（埴谷）の一言につきる。政治における「敵」は「公敵」のみであるが、しかも「やつが敵だ」というためには敵集団を全き統一性のもとに、あたかも一人の人間の如く（時には一人の人間に象徴してまでも）とらえねばならないが、この論理はひるがえつて自己をもそのようなものとして意識せざるを得ぬことになり、かくて、政治の論理にまき込まれるならば理論は——それが原理的に不可能である場合でも——一点を求めて凝集する。

ドイツ革命の挫折によつて孤立したソヴエトが、よくその孤立に耐えながらスターリンの下に発展を開始した時、世界の共産主義者達は共産主義運動の凝集点をそこに見出した。政治の論理は、この確固として存在する「労働者の国」ソヴエトを社会主義のシンボルに、その「天才的指導者」スターリンをすべてがそこから流れ出してそこに帰つて行く全共産主義運動の根源にせずにはやまなかつた。労働者の祖国ソヴエトが驚異的な発展をすればするだけ、ますますこの傾向は強まつていつた。そこには、天皇制意識にも比せらるべき、レーニン・スターリンを縦軸とする同心円的価値意識が構成されていつた。そこには、ソ連人民と全世界共産主義運動の二重の悲劇があつた。この過程でソ連の官僚支配と疎外化はゆるぎなく進行し、世界共産党の官僚構造は完成しスターリンの革命理論によつて世界革命は挫折させられていつた。

われわれが、ソ連官僚打倒を世界革命の中に位置づけ、「社会主義や、まして共産主義が、一国において実現されると考えるのは愚劣な空想である」（綱領第三次草案）というのはこのような全文脈の中でなのである。

### 四、新たな思想的組織的闘争を！

ここまで分析したいま、われわれは確信を持つていうことが出来る。彼等の批判は批判ではない。スターリン批判をやつたフルシチヨフでもなく、「現代トロツキズム」を批判する津田氏的左翼(?)でもなく、われわれのみが革命闘争に・理論戦線に新たな息吹きを与え、真に革命的な勢力を結集しうるであろう、と。

「今私達の眼前にあるトロツキズムは、単なる観念としてではなくて、日本の歴史の流れの中に一つの必然的な役割を担つたものとして現れているのである。このような左翼における新しい思想的展開は、日本人の持つ可能性について私達に明るい期待を抱かせるものだ」（「思想の科学」渡辺一衛）

現在、世界的にみられる『トロツキズム』の発生は、世界革命にまつたく新らしい可能性を与える条件を提供している。

津田氏は「現代のトロツキスト」は共産党から分離するにあたつて空ツポになつた頭をトロツキーの権威で満たした、とか、この思想方法は百パーセント・トロツキズムであるとかつぶやくのみであり、われわれがひとつの政治勢力として登場したことによつて、津田氏自身をも含めて全理論戦線が全く新しい局面を見出したことに気づかない。思想を単純に類型化すること・現実運動を微視社会学的（スターク）に分析すること・しかしない津田氏は自身も激流にまき込まれているため、全体が大きく動いていることに気づきえないのだ。

津田氏は、党内外のコミユニケーシヨン・ルートが断ち切られていることが、「現代トロツキズム」発生の最大の要因であり、彼等がトロツキーの権威にのりかえたから現代の「トロツキズム」が発生した、とみるのであり、その思想内容批判として先にあげたソ連官僚の問題・世界革命の問題・平和共存の問題に若干の現象的批判を加えているが、彼が批判の網の目から逃がしているもの、あるいは全然言及していない点にこそポイントがあるのだ。

「現代トロツキズム」発生の意義を知るためには、日本においてこれまで唯一の革命政党であつた共産党とかいう組織にふれなければなるまい。スターリン的ジグザグの中で革命を阻害し、多くの優秀な革命家をつぶし続けたにもかかわらず、それだけしか革命党がないというただそれだけの理由で存在を維持してきた共産党、しかもそこには例にもれず、天皇制を裏返しにしただけの前衛党意識、価値中心流出的思考があつた。党員のみでなく「共産党コンプレツクス」と呼ばれるように、それは全左翼の中にあつた。ア・プリオリに党を前衛とみるこの見方からは、党の誤りは具体的な状況における個々の誤りとしてしか評価できず、党の存在そのものに対する批判にまでつき進むことはありえない。党官僚の地位は、こうして支えられていた。

革命運動の行きづまりは、この党の存在そのものを問うべき根底的な戦略、戦術的・組織的批判を必要としていたが、党の官僚組織とスターリニズムの「革命意識」はそれを不可能にしていた。それはタブーであつた。レーニンに学んだわれわれはタブーをあえて破つた。

われわれが一つの政治勢力として登場するや、共産党はア・プリオリな前衛党の地位を追われ、すべての「革命」党はたえざる動態のとされ、この状況の中で前衛党に「なる」ものにも前衛的役割を「はたす」組織のみが前衛党たりうるという本来の姿にたち戻らされた。わが同盟も例外ではない。否、共産党と分離し一握りの組織から出発した同盟は本来ア・プリオリな前衛党でありうるはずもなかつた。共産主義者同盟は同盟員であるというだけの理由で革命家たることを保障されるようなチヤチな組織ではない。同盟は原理的にいつて各同盟員が革命闘争の中で指導的役割をになうことによつてのみ前衛党としての存立を許される。

かくてわが同盟の登場は、思想的・組織的全運動の固定状況を打ち破る最大の衝撃であつた。この流動化こそ革命理論の飛躍的発展を可能にする条件である。厳しいと同時に明るい展望がここにある。理論的・組織的闘争はますますくるしい・試練に満ちたものとなるであろうが、それは超一枚岩主義者や津田氏のような人々を除くすべての左翼戦線による激しい相互批判の中で豊かなみのりを約束するであろう。「現代トロツキズム」発生の意義はここにある。

### 五、「評論家」津田道夫氏について

津田氏の労作『現代のトロツキズム』批判を終つた私は、最後に、津田氏をしてこのような現象的批判に終始せしめたもの、彼自身の主体的問題意識の欠除について、「評論家」津田道夫について若干述べたいと思う。

およそ革命理論というものは、革命する主体が創り出して行くものなのであつて、革命理論の批判は、その理論を「あるもの」としてではなくて、たえず創り出され、創り出すものとしてとらえその創造の過程にまで突き進まないならば使命を全うしえない。現実の政治過程は複雑な諸事象の多様な組み合せの中で、津田氏のような人達には奇蹟とも思われるであろう意外な方向に発展するのであるが、当の「奇蹟」についてはわれわれは前もつて予想しえないにも拘わらず、それは、必然的な要素として、理論を構成する場合それを抜きにしては何らの展望をも語りえないものとして発生する。しかもその偶然的要素は自己の主体的努力を除外しては考えられないものなのである。

したがつて、単純・明快な範疇に思想を整理し「批判的批判」としかいえない想のものであり、一国社会主義論の問題を例にとるならば、それが何故革命理論の中心問題として論じられるを得なかつたのか、その理論構成のやり方・理論の機能はどうなのかという問題が全面的に欠落している。そのような批判は、革命の主体者として自己を位置づけ、スターリン理論を自分の意識の中で激しい痛みをもつて検討してきたもののだけに可能なことであろう。津田氏をしてどんづまりに到るまでの思想闘争を捨てさせている根本的原因は、理論の何たるかをとらえず単純・明快な範疇整理に終始する氏の姿である。例えばの話「『警官は武装して、非武装のデモ隊におそいかかつた』という非難が、ひろく一般にゆきわたつている。けれども、警官隊とデモ隊という複雑な性格を持つ二つの集団の衝突の中から、そのように一つの側面だけをとり出してきて、善悪をきめるというやり方は、きわめて軽卒にして危険なことだと思われる」などといつて涼しい顔をしている思想の科学・筑波とかいう人など警官に頭の二つや三つなぐられてみたらどうかと思うのである。警官隊と激突した者、あるいはその事実を自分自身の問題として考えた者のみが、埴谷雄高のいう、警官隊を「味方」化することをその具体的局面にまでわたつて深刻に考えうるであろう。

スターリニズムによる革命への痛烈な打撃を経てきた津田氏が、いまになつてもこんなことを云つているのだから、彼は、きつと革命を自分とは無関係に進行する天然自然の現象みたいに感じているに違いないのである。

---

## 国際経済問題

# 世界資本主義の危機

## それはいかに進んでいるか

先進資本主義国、イギリス、西独、において、なかんずく日本においてたしかに今年に入つて以来、資本蓄積の進行にずいはんする経済的矛盾は、若年労働力の欠乏、熟練労働力不足とまさに、拡張と共に企業合理化の推進が生産した資本家的矛盾として、拡大し一方における最低賃金の急速な高騰による賃金水準の上昇、他方における国内機械工業の限界による機械設備の、海外輸入の急増を原因とする国際収支の不安と、その内包する矛盾の累積が著しく進展した。

しかし五八年末からのうち続く好況局面で蓄積された巨額な資金によつて、大規模な合理化を実施し、これを放置しておけば恐慌の条件を成熟させずにはおかぬ事態状況にささえられて同一技術水準によつて企業規模の拡張を今年度の設備投資計画のごとく個別資本が実施すれば労働力の吸収は著しく伸展し、それによつて労賃の高騰は利潤率の暴落を招来せずにはおかなくなる事態——これを合理化の推進によつて労働力の排出をもたらすという資本家的に処理解決する余力は西独、日、仏、伊等の現局面での資本主義に内在していたのだ。

ここにこそ、日本、イタリアの階級闘争が労働力のこかつを基礎にして、現行の過熱状想が経済危機に転する条件は、ヨーロツパ・日本を中心に、形整されつつあるが、来るべき景気後退の焦点は、イギリス・日本をその中軸にする。

日本資本主義は史上最初の全産業的な合理化の逐行を経験しつつある。生産設備の近代化は大企業のみならず、中小企業をもまきこんで日本経済の全構造を変革する物質的基礎を形成している。しかも現在、殊に三月以降、日本の工業生産活動の「横ばい」状態に見られる如く、昨年度後半から一路増勢傾向を保ちつづけた拡張状況は明らかに質的な転換をなしつつあるのだ。たしかに、その一因には、国内機械工業がその生産能力の限界に達し企業の欲する設備機械が早急には供給されえぬという事情もある。だが、生産指数の横ばいにもかかわらず、銀行からの設備資金の貸出しが、依然としておとろえぬ膨脹を呈している現実は、大産業を中心にする合理化投資が巨大に進展していることを物語る。今年度投資計画における資金調達において、いわゆる内部調達率は、中小企業において三七%、大企業にあつては五一%と、戦後他人資本に極度に依存率を高めた日本経済にとつては希有の事態を示している。これはとりもなおさず、五八年後半からの圧倒的な好況過程において、いかに莫大な利潤が形成されてきたか、それが特に利潤としていかに巨額な内部留保を可能にしてきたかを物語ると同時に、帝国主義段階においては好況期に蓄積された内部資金を根拠にして、好況末期において生産設備の全面的な更新が企図されるのでもないことを物語る。

今、日本資本主義は、（それと同様の事態は西ドイツにも展開している。）大産業を中心とする近代的投資の活況を軸にして蓄積を展開している。だが、この膨大な近代化投資が現実に生産力化した瞬間には、資本家的には手の施しえない過剰能力となつて立ちあらわれざるをえない。既に、鉄鋼・化学繊維と、合理化投資が一貫して継続されている部門において生産の過剰化傾向は頭をもたげているのだ。

イギリス経済は、六月に入つて、一段とその様相をこくした。昨年十二月から開始した国際収支の赤字の現出は、昨六月、八九〇〇万ポンドと最高を示し、わけても輸入の激増はおおうべくもなかつた。

好況局面の末期、その企業活動の量的拡張を反映する労働力の枯渇と銀行からの設備資金の貸与の膨張は西ドイツをしのぐ規模に達した。大規模な設備投資の全産業的実施による投資景気から端を発したイギリス経済の過熱期は、今や急騰した労賃水準を基盤にしての、消費製品に対する膨大な需要を中心にした消費景気の性格を帯びている。自動車、テレビ、家具などの耐久資材、あるいは衣料製品に対する消費ブームは好調の一途を辿り、小売高は昨年十一月以来、累積を重ねている。

だが、ここに至つて、いわゆる耐久消費材は、欧州大陸向けの伝統的輸出品であり、イギリスの特徴的産業でもあるのだが、この増大を続ける消費材に対する需要に、ついに国内生産力だけでは応じ切れず、逆に完成消費材が輸入される有様になつた。更に国内の景気高揚により、原材料の在庫額が縮少し、これを補填するための輸入も激増した。

完成消費材と原材料品の輸入の増大による国際収支の逆調傾向の累積、ここにこそ、好況が不況へと大規模に転換する時に、その中心的な目が同じ景気の過熱下にありながらも、数次にわたる合理化を背景にしたところの強じんな競争力にものをいわせ貿易協定において常に巨額の黒字をつみ重ねてきた西ドイツではなく、機構的脆弱性を内部にもつイギリス、並びに日本に向けられてくるところの根拠がある。

アメリカにおいては十九世期末から二〇世期初頭にかけ、国内の広大な辺境地帯に植民地を拡大していく過程で莫大な労働力と資本が不足した。労働力の多い東欧・アジア等から移民によつ大量に調達すると共に、不足な資本は海外からの導入によつてまかなわれた。第一次大戦前は債務国であつたということろに現われているごとく、慢性的過剰資本の処理の問題、処理形態としての資本の輸出の問題はほど遠く、それ故に端的に帝国主義国だとは言いきれぬ過度的な状態をアメリカ資本主義は示していた。しかし、追加労働力の不足が常に目立ちそれゆえ労賃水準が比較的高かつたから、ここにおいては労働力の節約は、最大の資本家の課題となり、生産方法の改善は最も早期から追求せられてきたのであつた。

第一次大戦はアメリカ資本主義の構造的変革を一挙に実現するとともに、又それによつて帝国主義の国際関係をも一変せしめたのである。アメリカは参戦した時期も遅く、その地理的位置からしてほとんど局外者に近い立場になつたから連合国からの軍需品の需要は著しく増大した。そればかりでなく、英独、仏が従来支配していた価格市場に進出する好機に恵まれ、国内産業は大戦を契機に飛躍的に生産力を拡大した。この飛躍的発達をとげたアメリカ資本主義が国際帝国主義の間に占める決定的な支配的地位は大戦後も上昇の一途を通りここに資本主義の国際的中心はアメリカに移つた。

二〇世紀の初頭より、労働力の節約のために一貫して続けられてきた企業合理化によつて商品競争力にあつても決定的な優位を確立した。アメリカ資本主義は、二〇年代後半、熱狂的なブームを現出するに至つたアメリカ合衆国の異常な工業生産力の発展は、アメリカ企業における利潤率を上昇せしめ、ここにアメリカ本国における有価証券投資の利率は投資家にとつて極めて有利なものとなつた。

第一次大戦後、国際金融市場の焦点となつたニユーヨークにおいては、ドイツを中心とする外国公債への興味は喪失され、国内投資に方向づけられると共に、国内投資への急激な方向転換に拍車をかけられたニユーヨーク株式市場は投機熱を煽られ、ここに相場投機の状態が訪れると共に、投機熱はさらにドイツを中心に投下されていた大量の国外投下資金のニユーヨークへの還流を生み出したのである。かくして膨大な資金あるいは短期流動資金はニユーヨークに集積し、アメリカ以外の諸国は重大な金融払底の事態に見まわれるに至つた。かくして、三〇年代に突入した国際金融市場は一触ガカイの危機を内蔵していたのである。それは、アメリカにおける株式市場の崩落によつて火をつけられた。

第二次世界大戦後、いくどとなく世界資本主義の内部に発生した不況は、一度も金融的激成現象を呈することはなかつた。それは、一九四九年度においで成長したドルを基準にした国際的な為替レートの内部に国際面の金融は強固に固定されていたからであつた。

だが、五九年一月、ヨーロツパにおける通貨交換性回復を境に国際金融市場の流動状態は、五九年以後の好況過程の伸展に支えられ、具体的には、米英独三国の相次ぐ金利変動に影響されてあきらかに高まりつつある。イングランド銀行の公定歩合の引き上げに応じて銀行割引手形、一流商業手形は夫々四分の三%、四分の一%、ロンドンにとつては異例の高金利の直接の結果として利かせぎのために各国のホツトマネーが流入する状態がおこつてきた。だが今年末、すでに慢性化してきた国際収支の赤字傾向の累増に伴なう金外貨準備の流出を相殺するために英国政府はむしろ短資の流入を歓迎する態度をとつてさえいるのだ。これはかつての金融恐慌の打撃を最も痛烈にこうむつたドイツがイギリス経済をはるかにしのぐ強力な安定力を持ちつつも極度にホツトマネーの流入を嫌つているのと対跡的な現象である。だが、金利差に基く短期資金の膨張は、金外貨準備をその現有力以上に過大に評価せしめ、一度経済的不安が生ずれば一斉に国外に逃避していくものである。イギリスは国際収支の逆調に基く保有外貨の払底を念薮するためにあえて流動資金の危険性も承知の上でその流入を容認した。だが既に露呈した機構的欠陥が累積を重ね単なる機構的欠陥から経済的不安に転化する時、ロンドン市場に集積されるホツトマネーは疑いもなく金融不安の要因となろう。

西ドイツ政府は先般の利上げの際にも流動預金に対する利払いの停止始めホツトマネーに対して強行措置を講じた。だが、西ドイツがイギリスとは逆に貿易黒字に基づく金外貨量が国内に増大し過熱化傾向による破たんを示さないでいるにも拘らず逆にそのことによつてマルク切上げ時の利益を狙つてここにも各国短資の流入傾向が見られるのだ。

現在、イギリスあるいは日本の企業がその企業活動自体が各国投資に支えられているという状態ではない。むしろ、先進諸国における膨大な過剰資本を吸収して、工業化を推進しているいわゆる後進国が欧米諸国による投下資本の全面的という形で恐慌的影響をうける可能性の方が濃い。

だがいずれにしても、現実の国際資本主義の運動にあつて、イギリスとドイツを両極にしたところの流動資金のとうとうたる移動は、この過熱的好況が後退へと逆転する瞬間には金融的不安を醸成せずにはおかないであろう。

五八年不況はアメリカを軸として展開された。アメリカ独占企業の操短による工業生産活動の停滞はアメリカ本国への原材料輸出出に基本的な経済活動を依存していた中南米・東南アジア後進諸国の鉱生産を過剰ならしめ、ぜい弱な基礎しかもたぬこれら後進国は輸出の決定的な停とんに基く国際収支の危機から貿易赤字をうめあわせるために極端な外国商品の輸入抑制を実施し、これら工業商品の欠点に基くインフレーシヨン、経済危機へとおちこんでいつた。そしてそれは後進諸国の工業化政策の過程で生ずる莫大な生産財に対する需要に応えることによつて輸出活動を支えてきたアメリカ以外の先進資本主義国にも多大の影響を与え、工業生産財の輸出の激化に伴う企業活動の後退は、国際収支の逆調傾向を伴つてここに景気後退は国際的性格を持つに至つたのである。即ち、アメリカにおこつた不況はその危機的焦点を屈折してフランスに収れんしたのである。だが現在、国際資本主義の中軸は第一次世界大戦以後、五八年まで単独でその位置にあつたアメリカに加えてヨーロツパ諸国がアメリカに並ぶ地歩を占めはじめた。

国際経済関係全体が急速に変貌しつつある、圧倒的な重圧を資本の利潤率に対して形成している労賃水準の一般的高位に悩むアメリカ資本主義は、今全面的な近代化、合理化の強行による生産力の一層の拡張と資本の競争力の回復に着手している構造的失業人口の四百万台突破に見られる失業人口の微増傾向は、この合理化過程の反映に他ならない。ただし、アメリカ工業活動の若干の回復が主として英日の全面的拡大に基づく機械整備の対米受注の増大によるところに現われている如く現下の好況局面を与えている主導的な諸国が西独、仏、英、日本である事実に着目する時、次の経済的危機と階級闘争の関連は五八年の状態の如く場所的に異る両者が屈折をして結合するのではなく、今、政治的、体制的矛盾を深刻にはらみつつも好況を最大限満喫している日本・イタリアそしてフランスという先進資本主義国において、後退へと逆転する事態が直接的に階級闘争の爆発と結びつかざるをえないだろう それゆえに、国際的激動の規模と性格は、五八年度のそれをはるかに上回るものにならざるを得ない。